

名軍師

黒田官兵衛③

一龍斎貞花

講談師

天下の三軍師とうたわれたのが、武田信玄の軍師山本勘助。豊臣秀吉の軍師竹中半兵衛に黒田官兵衛。

伊丹有岡城の荒木村重が、織田信長に謀叛。その説得に向った官兵衛は、村重のため土牢へと幽閉されてしまった。

一説には、官兵衛の意見で織田へ随身を決めた主人の小寺政職が、再び毛利へ寝返り、村重に「官兵衛を捕らえて下され」と、自分の心変りのため家来を売ったとも。こんな上司では困ります。

「どうじゃ、つらからうが。我が配下となると誓えば出してくれるわ」

官兵衛は土牢の中で、来る日も来る日も壁に向き合うだけ。頑丈な身体だが、水でふくことも出来ない、垢と冬中の寒気で松笠のようにかさかさ。やや暖かく

なってきたと思うと、体中得体の知れないでき物が出来、髪の毛の根元にぶつぶつした物が吹き出し、食物といえはわずかな玄米と菜を与えられるだけ、それを根気よく嚙んで糊のようにして胃へ流し込む。体を動かさねばと狭い檻の中をのそのそとはいずり廻ったが、衰弱しているため非常に疲れる、わずかな食物では足りなくなる。余りに飢えると空の胃腹が暴れだす。「じっとしているに限る」と、ただなにもせず、日がなぼんやりとして眠くなれば眠る。

「戦場にある時は、命はいつ投げ出してもよいと思っていたが、よくよく命は惜しいものだ」このまま死んだ方が楽になると思いながら、矢張り死にたくなかった。膝や袂を歩いている虱が唯一の友。

黒田家主従の絆

官兵衛行方不明に大きな驚きを受けたのが姫路の人々。しかしこうした中にも「家臣は一致団結して御本丸様に忠節を尽します」という黒田家古文書が残されている。側室を持つのが当たり前という中に、官兵衛は生涯側室を持たず妻だけを愛しています。単身赴任だからと現地調達は絶対いけませんぞ。

御本丸とは、官兵衛の妻と理解され、父宗円（隠居名）、叔父休夢、弟利高を中心に、官兵衛の妻を支える体制が敷か

れておりました。平気で他家へ走る者も多い中、主人の妻を支えて団結というのは、いかに主従の絆が強かったかが判ります。家康が今川の人質になっていた時も、家臣は岡崎の城を守っていました。社長と部下は、是非こうした絆、信頼関係を築いて頂きたいですね。

もっとも、伴長政の代に、後藤又兵衛が長政と対立し、白昼堂々と槍をかついで福岡の城を退出し、大阪の陣で西軍の将として大働きをしました。

官兵衛救出の決死隊が編成され、“日本国中の大小の神祇、八幡大菩薩、愛宕山権現、氏神にも違背あれば御罰をこうむらん”と、誓紙に血判を認めたるは、栗山善助、母里太兵衛、後藤右衛門（又兵衛の父）など13名、天正6年11月5日と記されています。

さてどうする、「村重に救いを求めれば、村重に組みさなければならん、さすれば人質となっている松寿丸様のお命はなくなる。とって織田方へ異心なきをしめせば、官兵衛殿のお命はむつかしい」決死の13名は、思い思いに伊丹の適地へ向かったのでございました。

官兵衛が戻らぬことを知った信長は、「裏切ったに相違ない、質子の松寿を殺害せよ」「官兵衛が寝返えるような男でないことをお判り下さらぬのか。それにしてもむざむざ捕らわれるとは……。さてどうしたものか」部下を信じる上

司です。ここにも信頼関係があります。

秀吉は、松寿丸を長浜から、半兵衛の城菩薩山へと移します。

一時持ち直した半兵衛は再びせき込むようになり、「我慢せずに養生してくれ、今そなたに死なれては秀吉の行く末はどうなる、半年でも一年でも養生してくれ、よいな」「勿体ないお言葉にございます、それでは我が郷里にて暫くお休みを頂きます。」秀吉が作らせた駕に乗って陣地を去る半兵衛。見送る秀吉の目に涙が光っておりました。

美濃岩村の菩薩山、山村の小城にしかすぎないが、ほっと落ち着きを覚えます。

「人の子は斬れぬ、貧しい土民の子なればなおふびん、町家の子とて矢張り斬ることは出来ん」戦いで敵を倒すことはあっても、身代りの子の首一つ求めることが出来ません。半兵衛の優しい心です。すると川で釣をしていた子供が溺れ死んだという、そこで両親にわけを話して懇望し、なきがらを貰いうけ、その首を白木の箱に納め安土へと送られたが、

「三木は未だ落ちぬか、有岡の村重を討て」と、信長はろくに首を改めません。

かくして天正七年、総大将織田信忠は、村重の有岡城を取りかこんだ。

果して官兵衛を救出することが出来ますかいか、次回のお楽しみ。パパン